



寄贈図書紹介

編集委員会

佐々木孝博著『軍艦進化論』

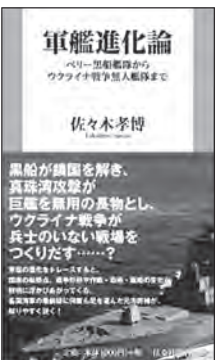
佐々木孝博氏（海自86）は、露防衛駐在官や統幕サイバー企画調整官等を歴任し、退官後は広島大学客員教授、明治大学客員研究員等として現代戦、未来戦の調査研究を行っています。その研究成果は『偕行』（ロシア・ウクライナ戦争を振り返る）（令和5年7・8月号）に投稿していただくとともに、安全保障講座でも数回にわたり講演されています。

本書は、「ペリー黒船艦隊からウクライナ戦争まで」という副題にあるように、19世紀後半から現代に至るまでの、技術革新及び戦争・紛争がもたらす軍艦の変化について、豊富な具体例を交えながら体系的に記述したものです。

その大まかな流れですが、まず、黒船来航に象徴される「砲艦外交」の時代から、「敵よりも大砲打撃力の勝る軍艦」へと進化します。日清・日露戦争はこの時代に相当します。日露戦争後には列強間で建艦競争が起こり、大艦巨砲主義による艦隊決戦が海戦の雌雄を決する時代へと移行

します。しかし、急激な軍備の増強は各国に財政負担を強い、軍縮の時代を迎えます。両大戦間に世界情勢が緊迫しだすと、軍縮条約は破棄され、再び軍備増強の時代に入り、新たな兵器として潜水艦や航空機が登場し、艦隊決戦から空母による航空作戦が主流となります。ハワイ海戦やマレー沖海戦で、日本はその主役の一端を担います。第2次大戦後は、空母を守るためにミサイル対応艦が必要となり、イージス艦・ステルス艦が登場し、更に弾道ミサイル対応イージス艦の必要性が増大します。そして、ロシア・ウクライナ戦争では、ウクライナ軍が黒海に「無人艦隊」を投入し、海戦のブレイクスルーを起こしています。

これからの海戦の技術革新のキーワードは無人化とAI化ですが、それはまさに著者の専門分野です。ぜひ、本書をご一読ください。



扶桑社新書 定価・税込1100円